
鴉達は何を求めるのか

無

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鴉達は何を求めるのか

【コード】

N9206X

【作者名】

無

【あらすじ】

その世界に、空はなかった AC3のオリジナルストーリーです。
基本原作沿いです。

プロローグ

地下都市レイヤード

人類が大破壊から逃れるために作った箱庭

その中で人は

再び戦いを繰り返していた

第三都市区：day9/24 Time19:58

静まり返った夜の都市、普通の人間なら寝ている時間だろう。

ACの状態をチェックしながらそう思う。

輸送機のなかは予想以上に良くゆれる、自分にとってはゆりかごでしかないが。

『もうすぐ目標地点だ、降下の準備を始めてくれ。』

耳のイヤホンから輸送機のパイロットの声を聞く。

脇においてあったヘルメットを取り、かぶる。

【メインシステム起動、自動簡易メンテナンスプログラム起動】

左のメインスイッチをいれると、ACのジェネレーターの駆動音が
呻る。

【HeadEye異常なし・・・LeftArm、LightArm
ともに異常なし】

パイロットスーツの対G装置を起動させ、モニターをACと繋げる。

【Leg異常なし・・・Coreチェック・・・Booster異
常なし・・・FCS異常なし・・・】

モニターが映り、輸送機の中が表示される。

【Generator異常なし・・・Radiator異常なし・・・
Optional part異常なし、オールクリア、システム異
常ありません】

レーダーの表示に異常がないかみつっ、左脇のもう一つのスイッチ
もいれる。

【戦闘モードに移行します。】

モニターに武器の表示が映り、1000マシが構えられる。

『時間だ、ハッチを開く、幸運を祈る。』

扉のロックが外れ、駆動音とともに開く。

夜の街は暗く、光もあまりない。

ヒュン

一瞬だけ赤いカメラアイが見える、目標のMTだろう。
コアのブースターを吹かせ、自分は一気に飛び出した。

「8機か……」

リーダーに映る赤い点を見て、そう呟く。
よくこれだけの数でグローバルコーテックスに襲撃しようとおもったものだ、戦力不足は明らかなのに。

『レイヴンだ！馬鹿な、速すぎ』

バガアアアアン

「一機目……」

拡散ロケを食らわせ倒す。

『退け！この数では勝てない！』

他の逆足MTは気圧されたのか退こうとする。
中に一機だけフロートタイプがいる、そいつにめがけてミサイルを
撃ち込む。

『ぐあ……』

四発全て命中し、あっさりと爆発する。
他のMTは混乱したのかバラバラに動く。

「……」

一気に近づきブレードを振るう。
緑の光が相手を切り裂く。

『うわああっ！』

上半身だけ吹き飛ばされ地面に落ちる。

『くるなああああ！』

三機ほど固まりロケットを乱射してくる、それをよけマシンガンで
掃射、穴だらけにした。

『か、かなわねえ、逃げろ！』

残りの二機はMTを乗り捨てて逃げようとする。

「はあ……はあ……」

「はやくしろ！建物の中に」

バババババババ

マシンガンで再び掃射、相手は穴だらけの肉塊になりはてる。それを一瞥し、上半身だけになったMTに近寄る。

『くそっ！キサラギの奴等、見捨てたのか！』

マシンガンを構え、右手のスイッチを押した。

『お疲れ様です、アビスタさん。』

「レインか。」

『すぐ輸送機を向かわせます、それまで待機しててください。』

「……確か今度異動だったな」

『はい、新人レイヴンにつくことになりました。』

「そうか、武装勢力の背後にキサラギがいる、背後関係を洗うように本社に言うておいてくれ。」

『了解しました、今度は戦場で会わないことを祈ります。』

「それは依頼が決めることだ。」

第三都市区：グローバルコーテックス傭兵宿舎 Time 20：
37

部屋の鍵を開け、中に入る。

部屋の中にはベッドと一つの棚、そして小さな机の上にあるパソコンくらいしかなく、殺風景だ。

ポケットに入れていたPDAが振動しており、取り出して操作する。

「メールか……」

一つはレインから、もう一つはグローバルコーテックスから、さらにもう一つ

管理者からだ。

まずはレインのメールをみる。

差出人：レイン・マイヤーズ

件名：レイヴンへ

『数ヶ月のあいだでしたがお世話になりました。本社の方から新任のサポート人員のリストが送られてきていますのでパソコンのほうに送っておきます。それと・・・あなたには「戦場」について学ばせて貰いました。私のレイヴンと敵対する事がないように祈ります。』

パソコンを起動し、リストを見ていく、だがほとんどが新人ばかりで、評価も低い者達ばかりだった。オペレーターは後回しにしたほうが良さそうだった。

次のメールを開く。

差出人：グローバルコーテックス

件名：報酬

『こちらはグローバルコーテックスです。今回の武装勢力の鎮圧、お見事でした。ご存じの通り、レイヴンに恨みを持つものはいくらでもいます。今回もその一端でしょう。背後関係については現在調査中です、結果がわかりしだいお伝えします。無傷のMT二機についてはこちらで2000cで買い取らせていただきます。報酬のほうも5000c追加しておきます。今後とも、グローバルコーテッ

クスに反することなく、活動を続けてください。』

7000cか、意外に高くついたな、報酬が10000cだから十分な稼ぎか。

そして最後のメールを開く。

差出人：管理者

件名：アフターペイン

『レイヴンへ、あなたの補佐として送っていたエグザイルを、一度メンテナンスで預かります、しばらくのあいだはNo.14と作戦を遂行してください。今回で地上の計測が終了しました、完全に人が住めるレベルまで回復しています、作戦の発動も近くなりました、準備を怠らないようにしてください。』

近い、か・・・

人類は、愚かだ。

常に己のことしか優先せず、他人の命を犠牲にする種族である。

それは管理された世界でも変わらない。

裏切り、裏切られ、信用できる者などいない。

特にレイヴンにはそれが顕著に現れる。

他人を信じる事などしない、信じれば最後、裏切られることが分かりきっているからだ。

だが人類がそうなるのにも理由はある、そしてそれを解決する方法も。

『敵』をつくれればいいのだ、人類にとって天敵と言える敵を。

そうなれば、どう転んだところで協力するしかない。

人類は、そうしなければ成長できない生物なのだから。

たとえそれが多大なる犠牲を払うものであっても

新人

レイヴン

他人の血肉を喰らい、死体を貪り、それにより生きているもの達

殺すこともあれば殺される事もある、そういう職業（傭兵）である

命の重さは、傭兵^{レイヴン}で有る限り、恐ろしく軽い

そして、それはこの世界では、自由の象徴でもある

グローバルコーテックス傭兵宿舎：day9/25 Time 7：
13

昨日の依頼の後すぐ眠ったためか、体の調子はいい。

だが、昨日何も食べていなかった事を思い出し。

棚から私服を取り出し、食堂に行くため着替えた。

傭兵宿舎

グローバルコーテックスが企業から貰った多額の仲介金により運営している場所。

その名の通り、レイヴンとして活動している者の住処である。

ただ、この宿舎はあくまでもレイヴンになったばかりの^{クラン}がない新人達のために作られた場所。

部屋にはトイレとベッドしかなく、風呂は集合浴場、食い物は食堂

でとるしかない。

グローバルコーテックスが運営している場所であるゆえに、他の企業や武装勢力から確実に守ってくれるが、そのかわり料金も高い。

なので稼いだら直ぐにレイヴン達は出ていくようになっているのだ。

食堂につき、トレイをとり皿と箸をのせる。

食堂はバイキング形式だが、あるのは解凍された食品ばかりであり食べる人間はいない。

バランスを考え、魚、肉、野菜を均等にとる。

何人が同業者がいるが会話をすることはあまりない。

いつ殺しあいをするかわからない相手に対し、仲良くなるように人間はいないだろう。

適当な席につくと、向こう側に誰かくる。

金色の短髪に、青色の目、活発な少年という感じの男。

「あの、席いいですか？」

その新人レイヴン、アップルボーイとのはじめての接触だった。

s i d eアップルボーイ

いよいよだった、この日がきた。

レイヴンになる日がだ。

昨日のうちにこの宿舎に移動させられ、今日の夜、最後の実戦テストを行う。

これにさえ受かれば憧れのレイヴンになれる。

同期のアデューも珍しく興奮していた、自分もだが。

そのせいか昨日はあまり眠れなかった、眠い目を擦りながら食堂に向かう。

「はあく飯食つたらまた寝ておかないと持たないな……」

そう愚痴りつつ食べ物を取り、席を探す。

あまり会話をしないのか、固まって食べているところはない。

ふと端のほうに一人、黒く少々ボサボサの髪の毛に、黒目で無表情な男がいる。

聞いた事があった、レイヴンとして活動しながらも上手くいかず、傭兵宿舎に今もいるレイヴン達の話。

あの人もその一人だろうか、そう思い声をかけることにする。

「あの、席いいですか？」

男はこちらを一度見て、なにも言わずに食事を始める。

……いいのだろうか？とりあえず自分も席につき、ビーフステーキを一口食べる。

「……不味い。」

思わずそういつてしまう。

「当たり前だ、冷凍したのを解凍しただけだからな。」

対面にいた男が話しかけてくる。

「はぁ……よく食べねますねあなたは。」

「なれた。」

「そ、そうですか。」

そういいまた食べる作業に戻る。

……やっぱり不味い。

「そういえば自己紹介がまだでしたね、自分はアップルボーイとい
います。」

「アビスタ。」

「アビスタさんですか、よろしく願いします。」

アビスタは嫌な顔一つせずに食っていく。

本当に慣れているのだろう、見てるぶんには問題ないが、このお世辞にもうまいとは言えない飯を今から食わなきゃならない。

「自分はまだ最終試験が残ってましてね、今夜受けるんですよ。」

「……」

「アドバイスとかないですかね？」

「ないな」

「そ、そうですか……」

「同じ傭兵にそんなことは聞かないほうがいい。」

「どうしてですか？」

「適当なアドバイスならまだいいが、悪いアドバイスをしてあえてレイヴンになる前に終わらせる奴もいるからな。」

「ああ、なるほど。」

「それに殺し合いをするのに好き好んで仲良くなる奴もいないだろう。」

「あはは・・・たしかにそうですね。」

そんなことを言っている間に向こうはどんどん食べ進めていく、かなり量があつたはずなのに・・・

「・・・これ以上話すことがないならもう行くぞ、ACの調整もあるからな。」

「あ、はい、助言ありがとうございました。」

「・・・」

アビスタは無言で席を離れていった。

意外にいい人なのかもしれない、そう思った。

やっぱりこの飯はまずい・・・

知り合い

この世界で生きているものは、意外に情が深い。

こんな職業レギュラーをやっているものでさえ、大多数が殺す相手に情を覚える。

だがそれは甘さにしかならず、そのせいで死ぬ傭兵レイガンもおおい。

だが同業者に助けられる、これはどんな依頼でもおきる不確イレ定要素ギョラーに対する企業の対処法だ。

そこから傭兵レイガン同士の絆ができ、パートナーを組むものも少ない。

どんな人間にも感情はある、それは当たり前のことであり、普通の状態でもある。

だがこの職業（傭兵）は、そこを割りきらなければならぬ、そうでなければ、自分が死ぬだけなのだから

グローバルコーテックスガレージ：day9/25 Time 8：
16

ガレージの中に入ると、すでに整備員がACを修理している。

赤と黒の色で塗装され、相手に威圧をあたえるような配色になっている。

あるACをもとにしたカラーリングだ。

左肩には、真っ黒な四角の中に、赤い0の数字が入ったエンブレムが書かれている。

「お、おはようさん。」

「主任さん、どうも。」

「ほとんど傷もねえし、装甲を張り替えるだけで問題ねえだろ。」

「……右腕の反応が少し鈍かった、電線に傷でもあるかもしれない。」

「よしわかった点検しておくよ、今日の依頼はあるのか?」

「いや、特にない。」

「わかった、まあ早めにおわらしといてやるよ。」

そついつて主任は修理に戻っていく。

自分はA Cの隣にあるコンソールを操作する。

企業がまた新兵器を開発したらしい、データが届いていたので試してみる。

制作会社：キサラギ

KWG - HZL30：左手武装パーツ

価格：43000c

重量：283kg

消費EN：14e

弾数：30発

概要：三発分裂投擲銃、弾はナパーム弾を使用、対A C戦を想定して作られた。すでにシュミレーションに搭載済み。

制作会社：クレスト

CEEC - 01 - XSP2：エクステンションパーツ

価格：44000c

重量：304kg

消費EN：236e

使用回数：2回

概要：強制冷却装置、ACの熱暴走時に力を発揮する。内部の放熱機能とラジエーターを強制的にフルパワーに引き上げる。すでにシユミレーションに搭載済み。

エクステンションのほうはいいとして武装のほうは試しておきたいな。

そう思っているとPDAが振動する、メールだ。企業からの依頼書だ。

差出人：ミラージユ

件名：侵入者の排除

『昨夜、レイヴンに我々の管轄にある第二研究所への襲撃が行われた。防衛部隊とこちらが雇ったレイヴンによって撤退させたが、今日になってMT部隊がこちらに侵入してきた。奴等は地下水路を使い、研究所に侵入、研究データの強奪を目論んでいる。これを阻止してくれ。防衛部隊は昨夜の襲撃で戦闘不能状態だ、援護はできない、おぼえておいてくれ。』

報酬：25000c

・・・悪くないな、相手はMTだけのようだ。

「主任は・・・あつちか。」

少し急ぎつつ、輸送機をPDAで手配した・・・

第二都市区ミラージュ第二研究所 Time 9:00

輸送機はほとんど出ていたので輸送ヘリをつかって直行する。

第二都市区の東側、シティの中心の巨大な四角い建物にミラージュのマーク、ビルの周りは四角い建物に囲まれている。

目的地の第二研究所だ

敵の規模は小さいが、あちこちに分散しているので僚機がついた。

早めに鎮圧したいらしい。

僚機の情報はなく、あとから入るらしい。

『目標地点に到達、投下する。』

「了解。」

背中とコアに付いていたアームが外れ、重力に従い機体は落下する。

大きく着地音をたて降り立つ。

『聞こえるか？こちらはミラージュ第二研究所だ、扉を開ける、すぐに敵を殲滅してくれ！』

その通信と共に研究所の扉が開く。

「……防衛部隊は？」

『全滅した、区画を閉鎖して時間を稼いでいるが作業用のMTがほとんど破壊している、中央研究棟に到着するのも時間の問題だろう、急いでくれ！』

自分はOBを起動させ、一気に研究所内を進む。

だが道を塞ぐがごとくクレスト製逆足MTが何機も出てくる。

研究所内の通路は狭く、避けて進むことはできず、マシンガンとブレードで破壊しながら進んでいく。

少し広い場所に出る、コンテナがおりてあり、レーダーのあちこちに敵の反応がある。

コンテナの影から出てきたのは無人警備ロボット、コンテナの間を縫い、マシンガンを撃ちながら近づいて来る。

マシンガンとブレードで倒していく、かなり脆いのでマシンガンだけで終わる。

扉を開け、通路を先に進んでいく。

目の前に赤いランプがついた扉、ロックされている。

「…………こちらレイ、区画の扉が閉まっている、開けられないか？」

『なに？少しまってくれ…………くそっ！ハッキングされている！別のところを開ける、そこから先に進んでくれ！』

「了解、どっちだ？」

『少し前の区画にもどって左の通路から進んでくれ。』

「了解。」

反転し、ブースターを吹かし進む。

途中四脚や二脚MTの残骸があつたがそれを無視して進む。

『きこ…………か…………コ…………レ』

「…………？」

通信がはいるが聞こえない、おそらくジャミングだろう。

かなり強力なものらしく、レーダーも効かなくなっている。

仕方なく敵が出てくるほうから進む。

逆足のマシンガンやロケットを何発か受けたせいかわ腕の精度が低くなっている。

ブレードとロケットを多様しながら先に進む。

『きこえる……スト……こちらコア・ストレイト、聞こえるか?』

「!……コアか、聞こえる、こちらはアビスタだ。」

『アビスタ?!……随分と久しぶりだな。』

聞こえた声は懐かしい声、だがいまはその感情を置いておく。

「ああ、それより今どこにいる?」

『中央区画の近くだ、そっちは?』

「自分もだ、この先に……」

右に通路を曲がると、巨大な盾を装備したMTがいる。

「重装二脚か……」

相手はバズーカを撃ち込んでくる、通路をバツクで引き返し、弾を避ける。

『まかせろ。』

コアが後ろからロケットを撃ち込みマシンガンを浴びせ爆発させる。煙が晴れるとそこにいたのは逆脚で、自分と同じ黒と赤のカラーリング。

特徴的な頭に、右手には500マシンガン、左には分裂投擲銃、肩には六発連射のミサイルと中型ロケット。

そして肩には青白い炎を口から吐く、三つ頭のケルベロスのエンブレムが書かれている。

『久しぶりだな、アビスタ。』

「ああ、そっちもな、コア」

だが長々と話すのは後でいい。

「どつちが先にいく？」

『俺が行こう、ミサイルで援護してくれ。』

「了解。」

まずコアが扉の前に立つ、自分はその後ろでミサイルをノーロックで向ける。

『3・・・2・・・1・・・GO!』

合図と同時に扉が開き、コアが先に突入する。

自分はその後突入、混乱している作業用MT二機にミサイルを撃ちまくる。

左側から重装二脚がバズーカを撃ってくるがそれをバックブーストでさげ、拡散ロケットを近距離で二回撃ち込む。

爆発、四脚二機がパルスライフルを撃ってくる。

それをさげミサイルを三発つつ当てて撃破。

後ろからさらに逆足がマシンガンを撃ってくる。

多少被弾するも直ぐに反転、ブレードで切り裂く。

ガトリング事真つ二つになりそのまま崩れ落ちた。

右側にいたMTは全てコアが倒していた。

『よし、通信とレーダーも完全に回復したな。』

「残敵0、終わったな。」

『にしても久しぶりだな本当に。』

「そうだな、だがベルセルク傭兵団はどうした？ソロで動くことは余りないはずだろ？」

『エイナのせいだよ、弾薬費が足りなくなってな……』

「エイナは力で押すタイプだから、仕方ないだろう。」

『ま、これで当面は問題ないだろ。今度またこっちに来るか？』

「……機会があればよる、また会っだろう。」

『敵同士じゃないことを祈るだけだよ。』

「そうだな。」

グローバルコーテックス傭兵宿舎 Time 10:20

あのとコアと別れて帰還、宿舎の集合浴場で体を洗う。

そういえば今日会ったアップルボーイといった新人、あいつもテストするほどの実力者かどうか……

今はまだわからない、自分は待つだけだ、そして力を測る、それが任務であり、俺の生存理由だからだ。

風呂につきりながらそんなことを考えていた。

風呂をでて食堂に飲み物を取りにいくと、大型ディスプレイにACが写っている。

他のレイヴン達もACを見ており、試合開始をまっているようだ。

「アリーナ」、簡単に言えば賭け試合。

レイヴン同士が戦い、勝った方に賞金が入る。

バーチャルで行われるので死ぬ心配はないし、安全に稼げる。

ただし、勝てればの話ではあるが。

「.....」

だが自分には関係のない話だ、部屋に戻り、眠る事にした。

知り合い（後書き）

駄文で申し訳ない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9206x/>

鴉達は何を求めるのか

2011年11月8日08時07分発行